

人の気もち 自分の気もち。

2年 T・Yくん

ほくは、心がいたいと、声が出なくなることもあるんだと、はじめてだった。

ほくも、親せきのおじさんが、のうのびよう気で、ほくをわすれてしまった時、ショックで、おじさんと話すことができなかった。コロナがはやる前、よく会っていたおじさんは、手足が自由だったけれど、たく山あそんでくれた。ほくは、「たかちゃん。」とよんでくれるおじさんがすきだった。でも、おじさんは、だんだん歩けなくなり、この前、おじさんと会った時は、「きみはだれ？」とふ思きそうにほくを見ていた。ほくは、(何でほくを忘れちゃったの?)ととてもかなしくなり、となりのへやへかかれた。すると、お母さんが、かかっているほくをよんだ。そして、二人でおじさんのそばへ行き、ほくの名前を教えた。けれど、おじさんは何も言わなかった。

ほくの家ぞくは、おじさんが出来なくなったことを手伝っていた。その中でも、一番手つだっていたのは智くんだ。智くんは、いつも、おじさんに、今から何をするか、やさしく話しかけてから、手つだいをはじめた。すると、おじさんは、時々ニコッと笑った。ほくは、智くんのやさしい気もちがおじさんにつたわっているのかもしれないと思った。それから、ほくも、おじさんに、「また来るね。」と一言つて、バイバイタッチ(手と手でソフトタッチ)をしてから帰るようになった。

ひかる石も、だまって楓くんの話聞いて、やさしく話しかけていた。だから、楓くんは、お父さんと話すと、会いたくても会えないお母さんの気もちを感じるようになったんだと思う。ほくは、人の気もちを心にとびこんだとかわかった。

この本を読んだ後、図書館で石の図かんをかりた。石は、地まげうの中のほくたちの見たことのないところで、長い時間をかけて作られていることをしった。

ほくも、今、入いんしているおじさんの心の声がかかるむらさき色の光る石がほくじ。